蜜柑

二

蜜柑

二

「もう、いつもいつも……」

小さい子どもたちは、とにかく、ひとつひとつ反応が返ってくるのが楽しいらしい。それが、多少意にそぐわなくても、毎回おなじものでも、仮に……怒られたとしても、からかうのには格好のねたで、それが、奈何(いか)に早苗の心のナイーブなところをついているのか、子どもの敏感な嗅覚はよく心得ている。

「まったく、やかましいったら……」

早苗は面倒看がいい。快活で、素直。あれこれ気が利くのも厭みじゃない。

特に子供たちの相手をするのが好きなようで、献身的ともいえる位に世話を焼きたがる。まだ年端もいかない、騒ぐだけでも楽しくて仕方ないような近所の子どもたちの面倒を、頼まれたでもなく看ている。それは、ひとりっ子の早苗が、少しでも姉らしくふるまえる、という満足感をみたすものであったのだが、とにかく、早苗は近所の子から慕われていて、通りで遇えば「ねえちゃん、ねえちゃん」と声をかけられているのである。

「少しだけ、お仕置きが必要かも……」

憤りの所在はどこにあるのか。

早苗と花田とは、ここ最近よく話を交わすようになった。狭い界隈ならば、無論顔を知らない人などいないのだが、特に親しかったという訳ではない。ある日の遣いの帰り、早苗が、ふと、角の八百屋の軒下に置いてある蜜柑にみとれていたとき、声をかけられたのが初め。なにを買うというふうでもなく、店前で、ぼっ、と佇んでいる姿が奇妙だったらしい。早苗は随分あとからその話をきかされたが、「そんなだったかしら……」と自分でも身に憶えがない。有様をきかされる度、恥ずかしい思いをするばかりだった。以来、通りで会えば挨拶を交わし、道すがら日々の出来事などを喋り合い、別れる。そんななにげない関係が続いている。待ち合わせることなどないが、互いに、時間と道の都合がいいようである。

「ものには限度がある……」

それを最近、皓次と小春にみられたのだ。やましいことをしている訳ではない。しかし、子どもたちにとってみれば、単純に、そう解釈されたのである。

鑑みれば、物珍しく映るのかもしれない。皓次や小春のような子どもたちなら、異性が混じって遊んでいたところでなにも感じないだろうが、早苗と花田のような年頃の男女が、親しげに並んで歩いている姿は、そうとられても仕方ないのかもしれない。

「私自身が、なんとか……」
なんといっても、相手は子ども。からから騒ぎたて、早苗の足もとを駆け廻っている姿は、なんともほほえましい。なにより、慕われている。なにごとも遠慮なく話してくれるのは、嬉しい。ここは年長者らしくしなければいけないだろう。
それに、このもやもやした気分は、屹度あの子たちを叱りつけたところで晴れそうにもない。寧ろ、もっと沈みこむに違いない。

「それにしても……」
雨が窓ガラスを小刻みに叩く。外ではしんしんと降り続ける。溢〻滅入る。
あのとき……自分はなにを考えてたのだろう？　軒下一面に並ぶ蜜柑の色……頭の中で、皮を剝き、果実を割り、一房まで取りだし描いてみる。それでも、考えていたことなど思いだせない。若しかすると花田にからかわれたのではないかと、訝しんでもみる。
早苗は足を投げ出して、唯呆けている。

「厭な空の色……」
強くない雨。その分、永久にやみそうにないようにも思える、厭な降り方。
花田の印象は、ごくふつうの青年といったところ。体格が大きい訳でも、小さい訳でもなく、

顔になにか特徴でもあるかといったら、特にない。その辺にいるような、ごくふつうの青年。街のパノラマに写り込む、エキストラのような。

強いていうならば、物腰の柔らかさがあまり男らしくない、といってしまえばそうかもしれない。寧ろ、それだから早苗は抵抗なく花田と接していられるのだが。

「なにをする気にもなれない……」

こう、しらじらしい雨の中では、譬え部屋の中にいても、用事を思いつかなければ身体を動かしたくない。すると、溢〻頭の中だけが冴えてきて、花田のことを——。

話しやすいのだ。早苗とは歳も近い。構えなくていい。こう云ったら語弊があるかもしれないが、後味がいい、そう思う。話していて厭なことを云わないし、純粋に楽しい。それは熱っぽい楽しさでなくて、いうなれば、誰彼の噂話や悪口みたいな、思いかえすと倦むような類の楽しさではない。ごく詰まらない季節の話など、とりとめのないことを、ゆるゆる話していく。仄かな「愉しさ」。

別れる前には気分が安らいでいる。別れることが惜しいと思わない位、緊張が解けている。

「なににつけても……」

花田はよく笑う。それが、大笑いでも、含み笑いとでもいうものでなく、軽くほほえむ。そ

れが嬉しくて、早苗もついつい喋りになってしまう。
この前は、安心からか少し気が大きくなっていて、界隈に住む人たちの噂話など……皓次や小春のこと、それを越えて彼らの親への悪口など……口走ってしまった。気がついたときには、誠実な花田の前で……自分を情けなく思った。「口が過ぎた」と赧(あか)らむ早苗を、唯ほほえんで赦してくれた。髪を梳くように軽く、済ましてくれた。
それだけなのだ。

「今度会ったときは堂々と……」
雨は続く。
考えごとはつれづれ進むものの、ふしぶしで雨音に気を奪われて、窓にぶつかる水滴よろしく、滴になって、弾け、流れていってしまう。少し強くなっただろうか。もういちど始めから、おなじようなことを繰り返し、繰り返し。

「怒るではなく、優しく説き伏せて黙らせないと……」
皓次や小春に接するときには、専ら歳上として、姉として、振る舞っている。花田とは歳も近しく、おのずと接し方が違ってくる。知らず知らずに遣っている上からのこと葉とは違い、同世代特有の、肩の力の抜けた喋り方ができる——自分でもそう気づいている。

花田といるのが、ちょっとした息抜きになっている。だからと云って、約束をして会う程ではないのだが。

「若しかすると……」

口振りだけではない。顔つきも、皓次や小春に会うときとは違う表情をしているのかもしれない。

鳥になって、電線の上から、商店街を歩く花田と自分の姿を思い描く。そのときの早苗の顔……考えると、含羞の念で耳たぶまで熱くなるような気がするのである。

「おねえちゃん！　おねえちゃん！」

外から、雨音にまぎれて、啼くかのような声がする。小春だ。窓を覗くと、傘を傾けてこちらを見詰めている。手に袋。訊くと、田舎のおばあさんから沢山戴きものがあったとかで、分けてこいと、遣いに出されたらしい。

猫のように身体をよじりながら戸をくぐり、早苗の部屋へあがる。濡れた前髪を拭いてやる。

「どれ、一緒に食べようか……」

鮮やかな蜜柑。

早苗は、こんな雨の日に、思いがけず話し相手ができたことが嬉しい。先刻まで、憎いかたきと、つらつら嘆いていたも忘れて。

小春は黙々と房にしゃぶりつく。憂鬱な雨の日だからなのか、それとも皓次が一緒でないからなのか、今日はおとなしい。しかし、考えてみれば、こう、改めて落ち着いて居会わすことなど、今までなかっただけなのかもしれない。

こうしてみると、本当に愛らしい。

「おねえちゃん、デートしてる！」

あのときは道端で、随分ませた口振りでからかわれた。早苗は思わずうろたえてしまった。花田と歩いていることは、最近は、ごく自然なことで、本当――本音から、そんなことを云われるなど思ってもみなかった。触れられたことのない内臓のどこか、触られたような衝撃。耳たぶまで赧くなっていただろう。

それが悪かった。

ここぞとばかりに、皓次は口撃を始めた。常(いつ)もしっかりしている姉さんが、あたふたしている姿が楽しくて仕方ない。小春もそれを真似して囃したてる。

……あのときも花田はほほえんでいた。早苗は申し訳なさと恥ずかしさで、花田の顔をみることすらできなかったのに、軽やかに。

「お茶をいれようか……」
小春は一心に、実を頬張っている。屹度袋を渡されたときから中身が気になって仕方なかったに違いない。道中、ちらちら袋を覗きながら歩く小春の姿を思い浮かべると、思わず笑みがこぼれる。

「おねえちゃんと花田さんは、デートなの!?」
藪から棒に云った。早苗は殴られたような気がした。常もの戸惑いを、湯呑みからこぼれた茶の所為にして、誤魔化してみせたが、どうにも繕えない。
頭の中が、一瞬にしてもやもやした雨模様に引き戻される。
全く、子どもは……

「なにを云いだすの……」
事実、花田は「友だち」……と云うのも胡乱な、……「知り合い」なのだ。その気持ちに間違いはないし、それ以上の……ことなど、考えたこともない。早苗の頭の中のどこにも、花田が棲んでいる場所などなかった。詰まりそれ位の関係なのだ。

「常も一緒にいるじゃない!」

小春は大きな瞳で、まっすぐ早苗の顔を見詰める。まだ幼い子のこと葉など、まじめに受けとることもないのだが、その円らな瞳で見詰められると、なんだか咎められているような居心地の悪さを感じる。

「だからと云ってね……」

だからと云って、ならば、なになのかという説明がつかない。果たして、早苗と花田の関係を、なんと定義するのか。

唯の「知り合い」が適当か。多分そうだろう。しかし、早苗自身、そう片づけてしまうのに抵抗を感じる。花田のことを……いうなれば尊敬している。前向きな信頼がある。しかし、「友だち」と云ってしまうとぎこちなさを感じる。どうにも説明ができないのだ。

なにより、この、変に戸惑っている心に説明がつかないのを、早苗自身が自覚している。

「おねえちゃんたちは、つきあっているんだ！」

問い詰めるかのように真っ黒い瞳で見詰める。断言されてしまうと……否、そんなことはない。表面でしか、互いのことを知らないのだ。花田がどのあたりに住んでいるか、とか、花田がどんな服装をするか、とか、そんなことは判っていても、互いにそれ以上踏みこまない。それが、「愉しく」いられるこつだと判っている。唯、一緒にいることが「愉しい」だけで、

一時の「安らぎ」でしかなく、況して「喜び」でもない。そのあたりのうやむやさが、納得できない気持ちの表れなのだ。

「あのねぇ、なん度も云ってるでしょう……」

とにかく、花田へなんの想いもない。早苗はこの手の話には疎く、はにかみ屋なだけなのだ。だから変に戸惑ってしまう。それだけなのだ。

それに、これが、云うような「つきあう」とは、なにか違う。屹度、もっと気持ちが高ぶるものだと思うし、もっと熱っぽくなるような、今まで感じたことのない情熱に駆られる筈だと思う。無い経験を幾ら考えたところで判る筈もないのだが、しかし、経験したことのない気持ちが芽生えていないからこそ、想い違いなのだ。

「好きなんでしょう!?」

――恋などと。

そんなことは、一切ない！　頭の中から掃きだした。これで早苗の気持ちは片づいた。

「花田さんだって、私のことなんて……」

……では、花田は？

花田は一体どう思っているのだろう？　どんな積もりで早苗と接しているのか。
皓次や小春にからかわれたのは、一度や二度のことではない。なのに、花田は常もするように、子どもたちにもほほえんでいるだけ。花田の本心は？

「だって！　嬉しそうだもん！」
あまりに澄んでいて、大きな瞳の中に自分が映っているのが判る。
小春は誠実なのだ。皓次とは違う。皓次は早苗をからかうのが楽しいのだ。小春のは好奇心。
小春は唯早苗と花田への疑問――男と女の不思議を背伸びして知りたがっているのだ。小春の瞳は無邪気に輝いている。
溢ゝ戸惑う。早苗自身が解けない曖昧さを、幼い小春が解ける筈もない。噛み砕いて説明すること葉がみあたらない。完結にふたりの関係を云うと……また自問する。花田は私のことを……？

「もう止めて頂戴……」
額が熱くなってくる。なぜに早苗はこんなに悩まなければならないのか。こんなに悩んでいるのに、花田は屹度、唯ほほえむだけ。
はっきりとしたことなど、なにひとつ云わない。軽やかに、話を弾ませるが、確かなことは

なにもない。

「だって！　だって！　ふたりとも楽しそうだもん！」

考えてみれば不公平だ。こんなにからかわれて困っているというのに、花田の方はどうだろう？　うんざりしているのは早苗ばかりで、それは偏（ひとえ）に早苗の面倒看のよさ故で、決して悪いことではない筈なのに、どうにもやるかたない。花田もおなじように近所の子どもたちに囃したてられることがあるだろうか？　否、ないだろう。彼と歩いている時に——短い距離ではあるが、早苗の知り合い——多くは界隈の子どもに遇うことはあっても、花田の知人から声をかけられたということはない。だからといって、つきあいが悪いということはないだろうが、人間関係は人それぞれ違うもの。

しかし、矢張り不公平な気がしてならない。

「でも、つきあってなんて、いないもの！」

誓約はない。ふたりの関係を決定づけるような、こと葉を貰ってない。「つきあう」などは畏れおおくとも、「友だち」だ、ということ葉も。

「ウソツキ……」

そう――恋などと。甘美な喜びなど、些かも味わっていない。
そして、私は花田にどう思われたいと――なにか、若しかして期待でもしているのか、心の片隅に、そんなかけらがあるのではないか。

「嘘なんて吐きません！」
寧ろ、はっきりそうだと云えないのが悔しい。腹立たしい。花田との会話に、少しでも匂わす断片があったか、思い返してもみつからない。

「ウソツキ……ウソツキ……」
全く不公平だ！
譬え花田が早苗を……どう想っていたとしても、早苗が花田をどう想っていたとしても、これでは仕方ないじゃないか。

「本当よ！」
胸が熱くなる。妙な動悸で眩暈がする。窓を叩く雨の音も、なにもかも耳を塞いで、投げ出して、横になってしまいたい。

「じゃあ……」
まばたきを増やし、もじもじしながら訊く。
「抱きしめ合った……？」「いいえ！」
「手は繋いだ……？」「いいえ！」
「キスは……？」
あの日。
夕暮れの木陰。
別れ際、蜜柑の一房の感触。
「それは、したかな……」

蜜柑

二〇一一年七月二十日　第一刷発行

著者　いかるが つみき
造本　知古 つとむ
発行　知古文庫

『たられば の世界』
http://ameblo.jp/tarareba-world/

版権所有
いかる

©Tsumiki Ikaruga 2011
Illustrations copyright © Chico Tsutomu 2011